

## 上海手話における人称代名詞のコピー：機能的な観点から

ジェーン・S・ツァイ

(台湾・国立中正大学)

Bullugi and Fischer (1972)ではアメリカ手話と英語の伝達効率を、3人の生え抜きの2言語使用者を被験者として研究している。彼らの発見したところでは、1秒あたりの語数は英語の方が手話よりも高かったが、1秒あたりの命題数は両者で同一であった。Myers, Tsay, and Su (2011)は、これらの発見について、会話産出分析のための改善された統計的方法を用いて、26人のろう者と31人の聴者を対象として、台湾手話と北京官話を対象として調査した。彼らの議論からは、台湾手話は北京官話よりも非常に大きな表現効率（音節あたりの命題数）を示したが、伝達効率（1秒あたりの命題数）は同一であったことが示された。この講演では、Myers, Tsay, and Su (2011)の調査の参加者に対して、そのフォローアップとして加齢の観点から行った縦断的研究について報告する。この研究では、2015-2016年に前回（2011年）の参加者が集められた。台湾手話は依然として北京官話よりも高い表現効率を示したが、伝達効率はどちらの言語でも減少しており、とりわけ北京官話で減少率は大きかった。これらの結果が示唆するのは、文法的能力（効率的に言語表現をコード化する能力）は、筋肉の動作が速く正確でなければならない運用能力（命題を効率的な速度で表現する能力）よりも加齢による影響を受けにくいということである。